

# ダウトゲーム

五十嵐貴久

第三回

Part 2 轢き逃げ

1

翌日の月曜朝八時、志郎しろうは泉岳寺駅せんがくじから品川桜署しょうなんだいのある港南台駅へ向かう京急電車に乗っていた。いつも通勤に使う電車だが、この時間だと比較的空いている。

立ったままスマホの画面に目をやった。昨夜、寝る前に、遅刻するなよ、とメールを紀子のりこに送っていたが、返事は来ていなかった。

紀子はまめな性格で、“はいはい”“わかってるって”と何であれ返事をしてるのが常だったが、既読がついているだけだった。

マナー違反だとわかっていたが、車内から電話をかけてみた。長く話すつもりはない。電話に出ればそれで良かった。

だが、紀子が出なかった。十回ほど呼び出し音が鳴り、留守電に繋がったが、残念ながらメッセージはない。

馬鹿らしい、と自嘲じちよう気味な笑みが浮かんだ。

両親がいない自分と紀子は二人だけの兄妹だ。親代わりを務めて

きたつもりだが、紀子も十代の学生ではない。

二十七歳の立派な社会人だ。兄が生活に口を出すのは余計なお世話だろう。

窓の外に目をやった。なぜか電車が遅く感じられた。まだ着かないのか。

港南台駅に到着したのは定刻だった。車両から飛び降り、階段を駆け上がった。

急ぎ足で改札を抜けて署に向かった。五、六分の距離を大きなストライドで進むと、すぐに署の建物が見えてきた。

何も変わりはない。つまらないことをした、と歩を緩めた時、ワイシャツの胸ポケットで着信音が鳴った。スマホを耳に当てると、

藤元だ、という声が聞こえた。

「今、どこにいる？」

凄まじい怒鳴に、志郎は足を止めた。

「署の真ん前ですが——」

正面入り口から、三人の男が飛び出してきた。全員、緊張した表情を浮かべている。そのまま、駐車場へ向かって走りだした。

「どうした？」スマホを耳から離し、志郎は叫んだ。「南部！どこ

へ行く？」

「橋口！」振り返った南部が車の後部座席のドアを開けた。「お前も

乗れ！」

訳がわからないまま、車に飛び込んだ。運転席に刑事係で一番若い矢野やのがいる。助手席に乗っているのは岩上いわがみだ。

もしもし、とスマホに呼びかけたが返事はなかった。藤元が切ったようだ。

「何があった？」

車が走り出し、サイレンの音が鳴り響き始めた。轢ひき逃げにだ、と南部が顔を向けた。

「南品川二丁目の住人から、自宅の生け垣で人が倒れていると通報があった。被害者ガイシヤは死んでいる」

「轢ひき逃げ？」

「現着した警察官から連絡が入った。現場にタイヤ痕こんが残っているし、死体の状況からおそらく間違いないと……」

「そうか……」

「轢ひき逃げがあったのは、今朝早くのようだ。車にぶつかって、生け垣まで飛ばされたんだろう。木に隠れていたために、発見が遅れた、と警察官が話していた」

車がスピードを緩めないままカーブに突っ込んでいった。

「矢野、そんなに急がなくても——」

「落ち着いて聞け」横から南部が志郎の腕を掴つかんだ。「発見されたの

は女性で、警察手帳を持っていた」

「警察手帳？」

「橋口紀子という名前があった。まさかとは思うが……紀ちゃんか  
もしれない」

「そんな馬鹿な……」

まだわからん、と助手席の岩上が振り向いた。

「おれたちが確認するしかない。何かの間違いかもしれん。橋口、  
聞いているのか？」

志郎は胸ポケットに手をやった。スマホ。履歴で紀子の番号を呼  
び出し、耳に当てた。

「……出る」

呻き声うめが漏れた。呼び出し音が鳴り始め、南部が顔を背けた。

「紀子、出てくれ」

呼びかけた声が震えている。呼び出し音が鳴り続けていた。

2

南品川二丁目の現場までは、車で十分かからなかった。大通りで  
車を降り、狭い道に入ると、周囲に黄色いテープが張り巡らされ、  
制服警官、鑑識員が立っていた。救急車も一台来ている。

南品川一帯は品川桜署の管轄で、二丁目は高級住宅街だ。比較的

大きな家が多い。

現場は品川柳街道と国道を繋ぐ脇道のひとつで、正式名称ではないが、小津通りと交番勤務の警察官は呼んでいる。幅三メートルほどの細い道だ。

男たちの前に、二階建の一軒家があった。数年前まで自動車会社の役員を務めていた小津という男の家だ。広い庭をツツジの生け垣がぐるりと囲んでいる。

小津通りと警察官が呼んでいるのは、巡回ルートに通称をつけておくと便利だからで、品川桜署管内だけで使う呼称だった。道は家々の間を三百メートルほど続いているが、私道に近い。街灯も数本しかなかった。

志郎はテープをくぐり、制服警官たちの後ろに立った。生け垣の間に、ジーンズを穿いた足が覗のぞいていた。右足はスニーカーを履いているが、左足は靴下だけだ。車と接触した際に飛ばされたのだから。

ジーンズの色に見覚えがあったが、志郎は首を振った。量販店で売っているジーンズだ。同じ物は何千着とある。

紀子のはずがない、と自分に言い聞かせたが、膝が言うことを聞かなかった。腕を岩上が掴まなければ、その場に倒れていたかもしれない。

「……紀ちゃん！」

背後から、南部の押し殺した叫び声が聞こえた。気配を察したのか、男たちが左右に退いた。

ジーンズ、薄い生地のTシャツの上にジャケットを着た紀子が仰向けで倒れていた。

こめかみの辺りから、血がひと筋垂れている。それ以外、顔に外傷はなかったが、シャツの腹部が大きく裂けており、青黒い跡が残っていた。

体を支えている岩上の腕を振り払い、志郎は紀子を見つめた。現実とは思えなかった。

制服警官を連れてきた矢野が表情を強ばらせたまま、岬山巡査で  
す、とだけ言っ下がつた。

「通報があったのは今朝七時二十分です」

若い巡査が怯えたような口調で話し出した。

「発見したのはこちらの家の小津洋一郎さん、七十二歳です。日課の朝の散歩に出たところで見つけたと……」

「それで君が来たんだな？」

岩上の問いに、そうです、と岬山がうなずいた。

「自分がここへ到着したのは七時半過ぎ、すぐに現場を確認しました。女性が死亡していること、小津さんの家の前にタイヤ痕が残っ

ていたこと、死体の傷などから、轢き逃げの可能性が高いと判断しました」

「続ける」

「現場に被害者の所持品と思われる小さなバッグが落ちていました」

岬山が茶色のバッグを差し出した。

「身元を確認するため中を開けると、警察手帳が入っていました。

品川桜署刑事課の橋口紀子巡査とわかり、それも合わせて報告しました。自分は——」

「救急は？」

すぐに呼びました、と岬山が早口で答えた。

「五分ほどで救急車が来て、橋口巡査の死亡を確認しました。その後、現場には手を触れておりません。血液の凝固状態ぎょうじょうなどから、死後七、八時間以上が経過していると、医師が話していました。橋口巡査が轢き逃げに遭ったのは、深夜一時前後と思われます」

くそつたれ、と怒鳴った南部を岩上が抑えた。

「静かにしろ……深夜一時に轢き逃げされて、発見されたのが七時二十分だな？ 六時間以上、紀子はこのままだったのか？」

品川柳街道から百メートルほど入った場所です、と岬山が小津通りを見渡した。

「深夜にここを通る者はほとんどいません。仮にいたとしても、生け垣のツツジに体が埋もれていたため、気づかなかったと思われる。轢き逃げされた直後に発見されたとしても……即死だったはずだ、と医師が言っていました」

「直接の死因は？」

「解剖しないと断定できないと……ただ、腹部に車と接触した痕が残っています。内臓破裂により腹腔内出血、あるいはショック死の可能性が高いそうです。時速六十キロ前後で走行していたのではなにかと——」

到着したパトカーが小津通りの手前で停まり、刑事と警察官が降りてきた。道幅が狭いので、パトカーが道路を塞ぐ形ふさぎになっている。

他の車両は通行できないが、やむを得ないだろう。小津通りの奥で、交通課の巡査が迂回うかいの指示を出していた。

紀ちゃんなのか、という声が後ろから聞こえた。誰かはわからないが、同じ品川桜署の刑事だろう。

信じられない、という思いが伝わってきたが、志郎は紀子から目を離すことができなかった。

頭では死んでいるとわかっている、納得できない。顔にほとんど傷がないため、眠っているように見える。声をかければ目を開くのではないか。



岩上のもとに数人の刑事と鑑識員が集まり、報告を始めた。路面に残されたブレーキ痕を確認したが、轢き逃げと考えて間違いない、というのがその要旨<sup>ようし</sup>だった。

車は狭い小津通りを六十キロのスピードで走っていた。歩いていた紀子に後ろから突っ込んだのだろう。腹部に衝突痕が残っているのは、気づいた紀子が振り返ったためだ。

運転者は前方を見ていなかったか、飲酒運転だったのかもしれない。衝突寸前、ブレーキをかけたが間に合わず、そのまま紀子を撥<sup>は</sup>ね飛ばし、怖くなって逃げたのではないか。

橋口、と岩上が顔を上げた。

「紀ちゃんはどうしてこんな狭い道を歩いていたんだ？」

あいつのアパートは南品川三丁目です、と志郎は歯を食いしばった。

「ここからだ、と四、五百メートルほど離れています。小津通りを歩いていた理由はわかりません」

私道ではないし、道沿いに家々が建っているが、狭くて暗い道だ。深夜に女性が一人で歩くような道ではない。

だが、すぐに別の刑事から報告があった。三百メートルほど先にコンビニがあり、店の防犯カメラに紀子が映っていたという。

地図を調べると、紀子のアパートからコンビニまで、小津通りを

經由するのが最短ルートだとわかった。コンビニから帰る途中、小津通りに入り、轢き逃げに遭ったのだろう。

お前は署に戻れ、と岩上が志郎に命じた。

「南部、一緒に行け。ここはおれたちに任せろ。必ず犯人を見つけろ。とにかく今は戻れ」

抗うことはできなかった。全身から力が抜け、何も考えられなくなっていた。

南部に背中を押され、パトカーに乗った。走り出した時、志郎の喉から嗚咽おえつが漏れた。南部は無言だった。

### 3

刑事部屋に入り、藤元に報告したのは南部だった。志郎は隣に立っていただけだ。

座れ、と藤元が言った。パイプ椅子に腰を降ろして、志郎はスマホを取り出した。

「……夕べ、あいつと話したんです」これで、とスマホの画面に触れた。「いつもと同じで、自分の話だけして……」

着信履歴を呼び出すと、十一時十分という表示があった。

「話が終わったらさっさと切って……それが最後でした。どうして

こんなことに……」

喉が詰まり、肩が震え出した。溢れ出した涙を止めることができない。

「おれは……こんな時、何と言っているのかわからん」藤元の口からつぶやきが漏れた。「だが、これだけは言える。必ず犯人を捕まえる。絶対に許さん」

南部が手近の椅子を蹴りあげた。藤元がゆっくりと首を振った。

「紀子は仲間だった。おれにとっては娘同然だったんだ……あいつは頑張ってた。女だからとか、そんなふう考えたことは一度もない。仲間を殺した奴は絶対に許さない。私情と言われても知ったとか。誰にも文句は言わせん」

同じです、と南部が荒い息を吐いた。

「犯人を逮捕して、罪を償つぐなわせてやりますよ」

全員聞け、と藤元が刑事部屋を見回した。

「何をしても構わん。あらゆる手を使って、紀子を殺した馬鹿を捜せ。橋口、お前にも加わってもらおうが、今無茶をすることは許さん。」

岩上たちの報告が出揃うまでは待機だ」

おれたちを信じろ、と南部が志郎の顔を覗き込んだ。

「詳しいことがわかるまでは、動いても無駄だ。それはわかるな？」

何も言わずに、志郎は自分のデスクに戻った。足に力が入らないまま、崩れるように座り込んだ。

午後一時、品川桜署に一人の男が出頭してきた。村川康雄、むらかわやすお二十六歳のフリーターだった。

約半日前、深夜に運転していた際、南品川三丁目の道で人とぶつかった気がすると供述きまうじゆつしたが、連絡を受けて志郎と南部が取り調べることになった。

記憶がはっきりしないのですが、と取調室の椅子に座った村川が話し出した。

「昨日の夕方、赤坂に住んでいる知り合いの女性のアパートに車で行きました。少しビールを飲んで……グラス一杯か二杯か、それぐらいだったと思います」

志郎は村川を見つめた。背は低く、かなりのやせ形だ。針で刺したぐらいしか黒目がない。

ジャケットを着ているが、サイズが合っていないかった。誰かに借りたのだろう。

「本当にそれだけか」

南部が机を強く叩いた。わかりません、と村川が顔を伏せた。

「車で帰りました。そこまで酔っていないつもりでしたが、道に迷って……ぼくのアパートはおおさき大崎にあります。南品川を通ったのは確

かですが、夜中だったのでスピードを出していたのかもしれませんが」

「それで？」

狭い道に入ったような気がします、と村川が言った。

「そこで何かにぶつかった記憶がありますが、人間とは思わなくて……念のために車を降りて辺りを捜しましたが、暗くて何も見つかりませんでした。急に怖くなって、そのまま家に帰りました。酔っ払い運転がばれると免許停止になると思ったんです」

「どういうつもりだ、と南部が村川のジャケットの襟を掴んだ。

「轢いた人間を放って逃げたら、過失じゃ済まない。わかっているのか？」

「すいません、と村川が泣き出した。人殺し野郎が、と怒鳴った南部を志郎は止めた。

「どうして出頭してきた？」

座り直した村川が鼻をすすった。

「南品川で轢き逃げがあったと、ネットのニュースに出ていたんです。昨日の夜中って書いてあったんで、やっぱり人を轢いたんだって思っただんです。申し訳ありません」

涙を拭ぬぐった村川が顔を手で覆った。

何で警察に連絡しなかった、と南部が怒鳴った。

「それでも人間か？」

申し訳ありませんと繰り返した村川が大声で泣き出した。  
志郎は南部に目をやった。ボールペンで調書を叩く音が取調室に  
広がっていた。

5

「どうなんだと聞いた藤元に、奴が犯人ですと南部が答えた。

「村川が乗っていた中古のBMWですが、ボンネットの左前が大きくへこみ、ヘッドライトも破損していました。現場に残っていたガラス片、塗装片とそうへんから、同じ型のBMWだとわかっています。塗装の剥げ具合から、二十四時間以内に接触事故を起こしたと考えられると鑑識から報告がありました」

「本当に女友達の家に行ってたのか？ どうしてあの道を通った？」

「女は赤坂あかさかに住んでいる高校時代の友人です。確認しましたが、村川のアパートは大崎で、赤坂からだと言品川付近を通ることになります。運転しているうちに道に迷ったという供述は信用できません。飲酒運転ですから、大きな道路は走りたくなかったでしょう。小津通りに入り込んだのはそのためだと思います」

「どれぐらい酔ってたのかね、とデスクに座っていた高品たかしなが口を開いた。血液中のアルコール濃度はほぼゼロでした、と志郎は答えた。」

「十二時間以上経過していますし、六、七時間ほど寝たそうです。アルコールが分解されるには十分な時間でしょう」

馬鹿な男だ、と藤元が目をつぶった。

「何もあんな細い道を通らなくてもいいだろうに……端から端まで、二分もかからんだろ？ 巻き込まれた紀子のことを考えると……」

不運としか言えません、と高品がうなずいた。

「たまたまあの道を歩いていたら、村川の車が突っ込んできた……事故はそういうものかもしれません」

「目撃者は見つかっていないのか？」

夜中の一時ですからね、と南部が口をすぼめた。

「聞き込みを続けていますが、目撃者がいたとは思えません。小津通りには防犯カメラもないですし……」

小津さんにはわたしが改めて話を聞きました、と高品が薄くなつた頭を搔いた。

「急ブレーキの音が聞こえて目が覚めた、と話していましたが、すぐにまた眠りについたそうなので、時間ははっきりしません。一時だったのか二時過ぎだったのか、何とも言えないと……」

徹底的に調べろ、と藤元が命じた。

「村川は事故を主張するだろう。危険運転致死傷罪で逮捕したいが、証拠がないと厳しい。人一人の命を奪っても、下手すりゃ執行猶予

だ。今回のケースだと、二、三年がいいところだろう。それじゃ紀子に申し訳が立たない。どうかしたいが……」

畜生、と南部が机を蹴り上げた。慰める<sup>なぐさ</sup>るように、高品がその肩を軽く叩いた。

6

夕方、志郎はQ&R南品川店というコンビニへ向かった。昨日の夜中、紀子が来た店だ。

わからないことがあった。紀子から電話があったのは夜十一時十分、会話していたのは十分ほどだったろう。

あの時、もう寝ると紀子は言っていた。だが、コンビニへ行っている。その理由がわからなかった。

食料品を買いに行ったのではない。夜十時以降は何も食べないと決めていたのは、志郎も知っていた。

可能性だけなら、どんなことでも考えられる。洗剤や歯磨き粉を切らした、宅急便を出しに行った、そんなことだったのかもしれない。

だが、夜中の十二時だ。それぐらいのことでコンビニへ行っただけとは思えない。

紀子はジャケットを着ていた。八月、熱帯夜で寝苦しいほどだった



た。

コンビニへ行くためにジャケットを着る必要はない。Tシャツとジーンズでよかったはずだ。

バッグを持っていった理由もわからない。決済用のアプリをスマホにダウンロードしていたから、キャッシュレスで支払いはできただろう。

しかも、バッグの中に警察手帳を入れていた。真夜中に持ち歩く警察官はいない。

習慣でそうしたと言われれば、うなずくしかないが、紀子はそんなことをしないという確信が志郎にはあった。

「いらっしやいませ」

店内に入ると、明るい声がした。二人の店員がレジで立っている。

手前のレジにいた小太りの若い男に近づき、警察手帳を見せた。

胸に三木・副店長みきという名札があった。

さつきもおまわりさんが来てたんですよ、と三木がレジの外へ出た。

「大変だったみたいですね」

詳しい話を聞かせてもらえますか、と志郎は言った。

「できれば、昨夜こちらで働いていた方に。今、いますか？」

ぼくなんですけど、と三木が自分を指さした。

「風邪ひいたから休むってバイトから連絡があつて、昨日今日とぼくがピンチヒッターで入ることになったんです。副店長ついても、しよせん契約社員ですからね。都合よく使われてますよ……バックヤードに来てください」

レジ奥の扉からバックヤードに入った。そこかしこに段ボールの箱が置かれている。

事務室も兼ねているんで、と三木がパイプ椅子に腰を下ろした。

「どうぞ、適当に座ってください」

「昨日は何時から働いていたんですか？」

夜十時からです、と三木が答えた。

志郎は内ポケットからスマホを取り出し、紀子の写真をスワイプした。見ました、と三木がうなずいた。

「この人です。ちよつと可愛いなって思ったんで、覚えてたんです。前にも何度か来てましたし」

「話はしましたか？」

「いえ、してません」

「彼女は何を買いに来たんですか？」

「買ってないと思いますよ」

「買ってない？」

「店の中には入らなかつたんで」

「入らなかった？」

おうむ返しに聞くと、そうですよ、と三木が苦笑した。他の刑事にも同じ質問をされたのだろう。

ただ、紀子がコンビニで何も買わなかったのは、志郎も想定済みだった。紀子の死体が発見された現場付近に、レジ袋がなかったからだ。

三木への質問は確認のためで、紀子がコンビニへ来たこと、だが買い物をするつもりではなかったことがはっきりした。

駐車場に立ってたんですよ、と三木が外を指さした。

「店の前に五台分のスペースがあるんですけど、あの時、ぼくはゴミ箱の片付けをしていて、ちょっと頭を下げました。前にも来ていたお客さんなのはわかってたんで」

「店には入らず、駐車場にいたんですね？ 確かですか？」

間違いないですよ、と三木がデスクのパソコンを立ち上げた。一分ほど待つと、これなんですけど、と画面を志郎に向けた。

「店内に三つ、店の外にも三か所カメラを設置していて、データはパソコンで見ることができます。万引きとか駐車場の不正使用とかよくあるんで……」

三木がマウスをクリックすると、駐車場の映像が画面一杯に広がり、その隅に女が立っていた。紀子だ。

時間は深夜十二時二十分です、と三木が画面の上部を指した。

「こっちにいるのがぼくです。背中しか映ってないですけど、ゴミ箱を——」

「この女性が何をしていたのか、わかりますか？」

話したわけじゃないんで、と三木が手を振った。

「何をしてたかとか、そこまではわかりません。人と待ち合わせ  
てたんだと思いますよ。結構いるんです。コンビニは夜中でも明る  
いし、安全ですからね」

「待ち合わせ？」

「別に迷惑じゃないし、ついでに何か買っていく人もいるし、どう  
こう言うようなことじゃ——」

「夜中の十二時二十分に、誰と待ち合わせしていた？」

わかるわけないでしょ、と三木が首を斜めみなにした。

「待ち合わせっていうのも、ぼくが勝手にそう思ってるだけで、た  
だぼんやりしていたとか、煙草を吸ってたのかもしれない。そう  
いう人もいます」

「紀子は煙草を吸わない」

「……紀子？」

妹なんだと言った志郎に、やっぱり、と三木が膝を叩いた。

「さつき警察手帳に橋口って名前があったから、同じ橋口ってどう

ということなのかなあって……そうすか、妹さんでしたか。いやオレもね、妹いるんすよ。ちよつと聞いたんですけど、この人亡くなつたんですよね？」

「そうなんだ。詳しい事情が知りたい」

わかりますよ、と三木が同情するように言った。

「ただ、ホントに話してないんで……詳しいことはちよつとわからないです。すみません」

いいんだ、と志郎は手を振った。紀子は何のためにコンビニへ来たのか。なぜ駐車場にいたのか。

志郎はパソコンを見つめた。紀子が左右に顔を向けていた。

7

コンビニを出て、志郎は紀子のマンションに向かった。五分ほどの距離だ。何度も来たことがあったし、合鍵も持っている。

ドアを開けると、1Kの部屋があった。三カ月前に来た時と何も変わっていない。

きれい好きなのは昔からで、室内は整理整頓が行き届いていた。服が出しっ放しになっているようなこともない。

管理人への連絡は済んでいた。今月中に退去してほしいと言われている。

いったん外へ出て、両隣の部屋のドアを叩いた。月曜の夕方だったが、運よくどちらも住人がいた。

大学生とOLに話を聞いたが、昨夜十二時前後、紀子の部屋のドアが開く音は聞いていないし、物音もしなかったと首を振るだけだった。隣人に興味がないのだろう。

志郎は紀子の部屋に戻り、居室の椅子に座った。

紀子は自分に電話を入れ、話してから寝るつもりだった。時間を考えれば自然な行動と言っている。

だが、その後外出している。部屋に固定電話はない。通信手段はスマホだけだ。

自分との電話の後、誰かから連絡が入り、コンビニで待ち合わせることにしたのではないか。そう考えれば、筋が通る。

誰かに呼び出されて、紀子はコンビニへ向かった。私用ではない。警察手帳を持ち、ジャケットを着ていたのは、刑事として会うつもりだったからだ。

まず、紀子のスマホの履歴を調べなければならない。自分と話した後、誰かから電話があったはずだ。

誰と、何のために深夜のコンビニで会うことにしたのか、それでわかるだろう。

藤元に連絡するため、胸ポケットに手をやると、スマホが鳴った。

「橋口くんか？」

警察医の大塚おおつかの声がした。年齢はちょうど十歳上だが、普段から親しくしている。

「聞いたよ。何と言っているのか……」

大塚が口ごもった。

「いえ、それは……どうしました？」

「うん、ちよつとね……死因は聞いたか？ 内臓破裂によるショック死だった。かわいそうに……」

「聞きました」

「確認したいんだが、時速六十キロ前後で走ってきた車に接触し、撥ね飛ばされたと鑑識の報告書に書いてあったが、本当か？」

「現場のブレーキ痕から、それぐらいの速度だったと推定されると鑑識員が話してましたが……」

「私が解剖したんだが、腹部に傷が残っていた。大きな傷じゃない。エネルギーが腹腔内に集中したんだろう。よくあることだ」

「わかります」

「ただ……車はBMWだったな？ 重量は約千キロだ。計算したが、六十キロで走行していたBMWと正面から衝突すれば、ダメージが残るのは当然だが、紀子ちゃんの内臓の損傷はかなり酷かった。実際には百キロ近いスピードを出してたんじゃないか？」

「……百キロですか？」

「そうとしか考えられない。小津通りはかなり狭いそうだね。写真を見たが、あの道幅で百キロ出すのは自殺行為に近い。六十キロでも速すぎるぐらいだ。脇道から誰か飛び出してきたら、避けることはできないだろう」

それはほくも思いました、と志郎は言った。

「ですが、運転者は酔っていたと供述しています。泥酔状態でいすいで運転していたとすれば、それぐらいのスピードになることもあるのでは？」

「どうもわからん、と大塚がため息をついた。

「べろべろに酔っていても、運転はできる。それでも、あれだけ狭い道に入り込んだら、反射的にスピードを落とすはずなんだが……いや、済まなかった。小さなことが気になるたちでね。確認のために電話しただけだ」

気を落とすなと言った大塚が電話を切った。

志郎は部屋を出た。雨が降り出していた。

8

夕方だが、まだ陽は沈んでいない。歩いて事故のあった現場へ向かった。



紀子のアパートから百メートルほど西へ進むと国道に出るが、コンビニへ行くには遠回りになる。

近道をするつもりだったのか、と辺りを見回しながら小津通りに入った。

現場検証は終わっている。一台の車が徐行運転で志郎を追い越していった。

紀子が倒れていた辺りに、小さな花束が三つ置かれていた。ぽつぽつと顔に当たる雨粒を拭いながら、志郎は左右に目をやった。

幅は三メートルほど、小津通り全体の長さは約三百メートルだ。脇道が何本かあり、入っていくと更に狭い私道で、両脇にアパート、マンション、一軒家が立ち並んでいる。そこには人が住んでいないし、子供もいるだろう。

飛び出し危険と大書きされている黄色い看板がいくつかの角に立っていた。土地勘のない者が使う道ではない。

深夜十二時過ぎ、おそらくは一時近かっただろう。ここを歩いていた紀子は村川が運転していたBMWに撥ねられた。

ブレーキ痕が残っていた場所から、紀子の遺体は五メートルほど離れていた。BMWにぶつかった衝撃で撥ね飛ばされ、生け垣の中に突っ込む形になったと鑑識員は話していた。発見が遅れたのは、紀子の体がツツジの花に埋もれていたからだ。

おかしい、と志郎は首を捻った。そんなふうなく体が隠れるとは思えない。撥ね飛ばされたとすれば、体がツツジの上に乗るが普通ではないか。

紀子が発見され、すぐに聞き込みが始まっていたが、目撃者は見つかっていない。望みが薄いのは志郎もわかっていた。

深夜から明け方まで、小津通りを歩いた者はいなかっただろう。私道に近い狭い道だから、それ自体は不自然と言えない。

だが、なぜ近隣の住人は事故が起きたことに気づかなかったのか。村川のBMWが紀子と接触した際、衝突音がしたはずだが、誰もそれを聞いていない。

ブレーキの音を聞いて目を覚ました、と小津老人は証言している。ただし、時間は曖昧だ。

深夜一時なら、他に起きていた者もいたはずだ。近隣住人のすべてが深く眠っていたとは思えない。

時速六〇キロの車が人間とぶつかれば、その音はかなり大きい。誰も目を覚まさなかったとは考えられない、と志郎は雨に濡れた髪の毛を手で拭った。

この道を歩いていた紀子が六〇キロで走る車に気づかなかったのも妙だ。エンジン音、ヘッドライト、走行音。これだけ狭い道で車が接近していたら、誰でもわかったはずだ。

本当に村川が紀子を撥ねたのだろうか。

違う、と志郎は暗い空を見上げた。ここではなく、別の場所で紀子を轢いた人間がいる。

村川ではない可能性もあった。深夜、紀子を呼び出した誰かではないか。

その人物は、重要な用件があると言ったのだろう。そうでなければ、紀子が夜中の十二時に外へ出て行くはずがない。

コンビニの駐車場で待ち合わせたのは、他に適当な場所がなかったからだ。防犯カメラの画像には、紀子が駐車場を出て行く後ろ姿しか映っていないかったが、待っていた相手が来たのだろう。

その後、何らかのトラブルが起き、誰かが紀子を車で轢いた。故意か、アクシデントかはわからないが、その人殺しは事故を偽装するために紀子の死体を小津通りへ運び、遺棄した。

推測だが、大筋は合っているはずだ。だが、証明は難しい。

まず、紀子をどこで轢いたのかがわからない。周囲の幹線道路は制限速度五十キロだが、深夜なら百キロで走行することもできたはずだ。

範囲が広すぎて、絞り込めない。昨夜、交通事故が起きたという報告もなかった。

紀子を呼び出した人間がいたのは間違いない。だが、仮にも刑事

だ。不審に思わなかったのか。

百キロの車が突っ込んでくれば、刑事でなくても気づく。轢かれるのおとなしく待っている者など、いるはずもない。犯人はどうやって紀子を轢いたのか。

犯人は紀子を撥ねた後、死体を移動している。その理由もわからなかった。

暗い予感が頭を過ぎ<sup>よ</sup>った。事故ではなかったのかもしれない。

対人の交通事故では、必ず車の一部が破損する。ミラーが壊れたり、ライトが割れたりすることもある。

すべての破片、塗装片を拾い集めることはできないし、現場には消すことのできない痕跡が必ず残る。急ブレーキによるタイヤ痕だ。

走行中に人を撥ねれば、誰でも反射的にブレーキを踏む。その場合、路面には確実にタイヤ痕が残る。

ただし、ブレーキをかけず、故意に撥ねたとすれば、タイヤ痕は残らない。それは殺人だ。紀子は殺されたのか。

一般人と比べて、刑事は他人に恨まれることが多いが、紀子が刑事課に異動してきたのは約一年ほど前だ。殺されるほどの恨みを買っていたとは思えない。

では、どういうことなのか。すべてが矛盾している。

犯人は紀子を殺害するつもりで呼び出したのか。それともアクシ

デントだったのか。

志郎は雨の中を歩きだした。まず、紀子の携帯電話の通話記録を調べなければならない。次は村川だ。

自分が轢いたと認め、出頭しているが、何かを隠している。誰かの身代わりになっているのかもしれない。

スマホで刑事課の直通番号を呼び出し、画面に触れた。雨が強くなっていた。

9

翌日の午前八時、志郎は南部と署の取調室で村川を待っていた。

面倒をかける奴だと唸り声を上げた南部に、現場付近を調べて浮かび上がった疑問について、志郎は順を追って説明した。

「一人で調べてたのか？ 気持はわかるが……」

「昨日の夜、藤元係長にも電話で話した。確証はないが、紀子は別の場所で撥ねられたと俺は思ってる。犯人には、違う場所で轢き逃げされたと思わせなければならぬ理由があったんだろう。過去に紀子が担当した事件絡みとか、単純な怨恨えんこんじゃない。何か……犯人にとって予想外の何かがあったんだ」

「何かって？」

「紀子の携帯の通話記録を調べたが、おれと話した五分後に、公衆

電話から着信があった。そいつに呼び出されて、コンビニへ向かったんだろ？」

「村川との関係は？ 自分から出頭してきたんだぞ。轢いたっていうのは嘘か？」

「奴は日野市の高校を卒業後、就職していない。だが、中古とはいえBMWに乗ってる。どこからその金が出てきたのか、つつけばぼろが出るかも……来たぞ」

ドアが開き、警察官が村川を連れて入ってきた。手錠を外した警察官が敬礼して取調室を出て行った。

申し訳ありませんでした、と立ったまま頭を下げた村川に、座れ、と南部が椅子を指した。

「あの……今日は何でしょうか？ もう話すことは何も……」

腰を下ろした村川の前に紙コップのお茶を置いて、志郎は別の椅子に座った。目配せすると、南部が口を開いた。

「いくつか確認させてもらう。一昨日の夕方、お前は赤坂の女友達のアパートに行った。車で行ったんだな？」

そうです、と村川が顔を伏せた。車はどこに停めていたんだ、と南部が質問した。

「女性のアパートに駐車場はない。付近のパーキングを調べたが、防犯カメラにお前のBMWは映っていなかった」

「道です……路上に停めました」

「彼女のアパートはひとつぎ一ツ木通り沿いにある。あの辺で路駐したら、三十分以内に駐禁の切符を切られたはずだ。女性の部屋にいたのは二時間ほどだと話していたが、その間BMWを見た者はいない。どうなってる？」

「離れたところに停めたんで、正確な場所は覚えていません」

都合のいい記憶力だなとつぶやいた志郎に、まったくだ、と南部がうなずいた。

「高校を出てから就職していないな？ 実家は日野市だが、今は大崎で一人暮らしをしている。そうだな？」

「はい」

「金はどうしてる？ 中古とはいえBMWに乗ってる。どうやって手に入れた？」

「働いていないわけじゃなくて、短期のバイトはしてるんです。家は両親が払ってます。車は先輩にもらいました」

気前のいい先輩だな、と南部が指で机を弾いた。

「BMWを見たが、五年落ちの中古にしてはエンジンやボディ、状態は良かった。あの車をタダでくれる先輩がいるとは思えん。お前の友人に話を聞いたが、金には困ってなかったと全員が口を揃えてる。それも親の援助か？」

「刑事さん……ぼくがあの人を轢きました」

大変なことをしたとわかっていきます、と両手で村川が顔を覆おおった。

「怖くなって逃げました。本当に申し訳ないことをしたと反省して  
います」

「そんなことを聞いてるんじゃない。本当にお前が轢き逃げ犯なのか？ はっきり言うが、誰かの身代わりになってるんじゃないのか？ 徹底的に調べれば、いずれ嘘はバレるぞ。その前に話しても  
らえると、手間が省はぶけるんだがな」

南部が身を乗り出した。本当です、と村川が声を震わせた。

「ぼくが……ぼくがあの人を轢きました。許してください」

泣きながら机に頭を打ちつけた村川の口から、切れ切れに謝罪の言葉が漏れた。止める、と南部がその肩を押さえた。

「質問を変えよう。隠していることはないか？ 罪を軽くするために、話していないことがあるんじゃないか？」

すいませんでした、と突っ伏したまま村川が髪の毛を掻かきむしった。

「轢いたのが人かどうかわからなかったと言いましたが、本当は

……人間を轢いたとわかっていました。怖くて言えなかったんです。

許してください」

涙と鼻水で汚れた顔を村川が手のひらで拭った。肩が激しく上下  
している。



うなずいた南部が志郎に顔を向けた。

「やっぱり、こいつが轢いたんじや——」

お前は人がいい、と志郎は村川の肩に手を置いた。

「こいつは嘘をついてる」

「そうとは思えんが……」

嘘じゃありません、と泣きながら腰を浮かせた村川の肩を、志郎は上から押さえ付けた。

「殊勝しゆしょうな顔しやがって……芝居がうまいな。迫真しやくまの演技だったよ」

志郎は紙コップのお茶を正面から村川の頭に浴びせた。

「何か隠していることはないかと聞かれて、人間を轢いたとわかっていたと答えたな？ 反省してると見せかけてるのは情状酌量じようじようしやくりよう狙いだろうが、足までは頭が回らなかったようだな」

足って何だ、と南部が机の下を見た。こいつは貧乏揺すりをしていた、と志郎は村川の濡れた頭を机に押し付けた。

「反省してます、後悔してますって奴が、貧乏揺すりをするか？ そんなわけないだろう。お前、何を知ってる？ 誰に頼まれて出頭してきた？ 身代わりの代償は何だ？」

離してください、と村川が志郎の腕を掴んだ。

「これは暴力だ。ぼくは罪を認めている。自分から進んで警察へ出頭した。そんな人間に暴力をふるうのは——」

「面つらが変わったぞ」

志郎は空いていた左手で村川の頭を机に叩きつけた。

「何をするんだ！ 警察が暴力をふるうなんて——」

知ったことか、と志郎は村川の髪の毛を掴んで立たせた。

「妹は時速百キロの車に轢き殺されたんだ。これで済むと思うなよ」

払い腰で投げ捨て、上から村川の顔面に拳こぶしを振り下ろした。止めてくれ、と村川が鼻を押さえた。

「止めるよ、止めてくれ……こんな暴力、許されるわけないだろ！」  
これぐらいじゃ暴力とは言わない、と志郎は村川の顔に革靴の踵かかとを叩き込んだ。

「折れた！ 鼻が……」村川の鼻から大量の血が溢れて、顔を真っ赤に染めた。「誰か、助けてくれ！ 殺される！」

本当のことを言え、と志郎は村川の胸倉を掴んで怒鳴った。

「誰に頼まれた？ そいつが紀子を殺した理由は？」

後ろから南部に腕を押さえられたが、離せ、と志郎は低い声で言った。

「止めるな。全部吐かせてやる」

やり過ぎだ、と南部が志郎を村川から強引に引き離れた。

「誰か来てくれ！ 橋口、何を考えてる？ こんなことをしたら……」

何をしてもしも紀子は戻ってこない、と志郎は革靴で村川の腹を蹴っ

た。

「こんな奴は殺した方が世の中のためだ」

尻で後ずさりした村川が、取調室の隅で体を震わせ、悲鳴を上げた。ドアが開き、二人の警官が飛び込んできた。

(続く)